

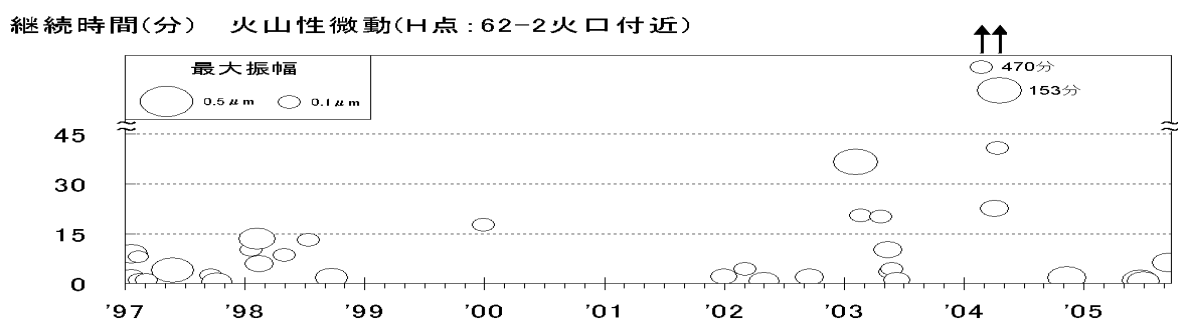
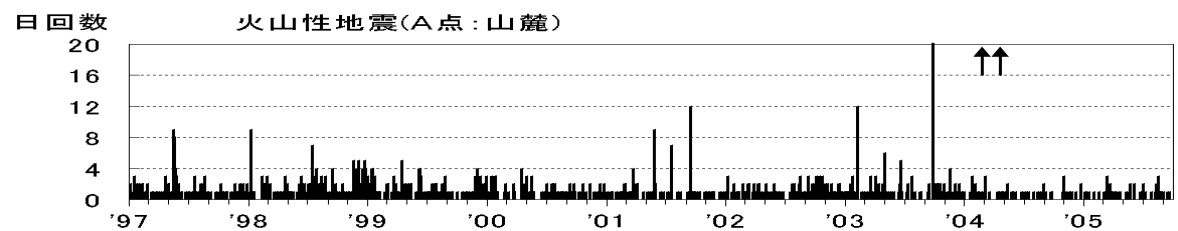
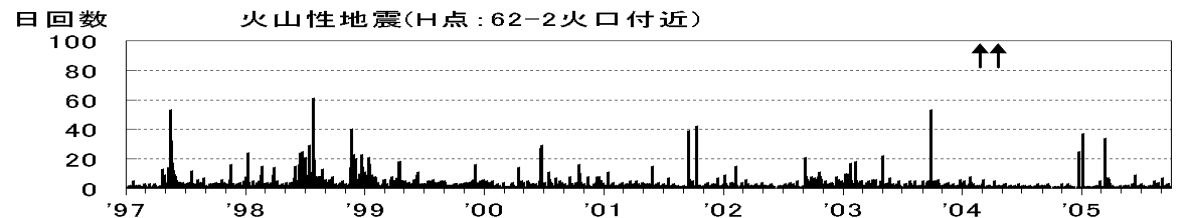
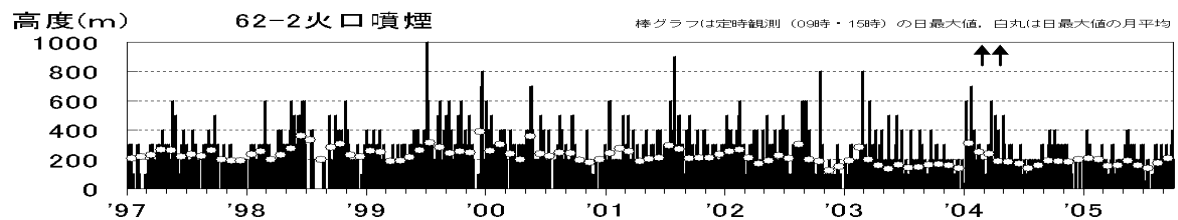
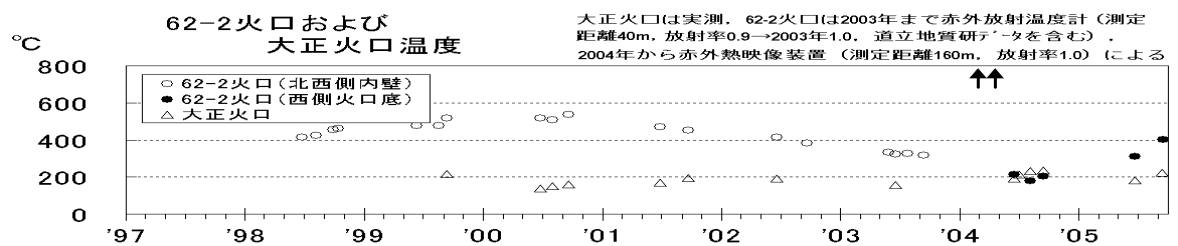
十勝岳

1 概況

62-2 火口は噴煙活動が活発で高温の状態が続いています。21 日には振幅の小さな火山性微動が観測されました。十勝岳の火山活動は引き続きやや活発な状態です。火口近傍では注意が必要です。

2 噴煙の状況

62-2 火口では活発な噴煙活動が続いています。噴煙は白色で高さは火口縁上おおむね 200 m で経過しました。21 日の微動発生時の噴煙の状況は悪天のため不明でしたが、天候回復後に高感度カメラで確認したところ、火口付近に降灰は認められませんでした。



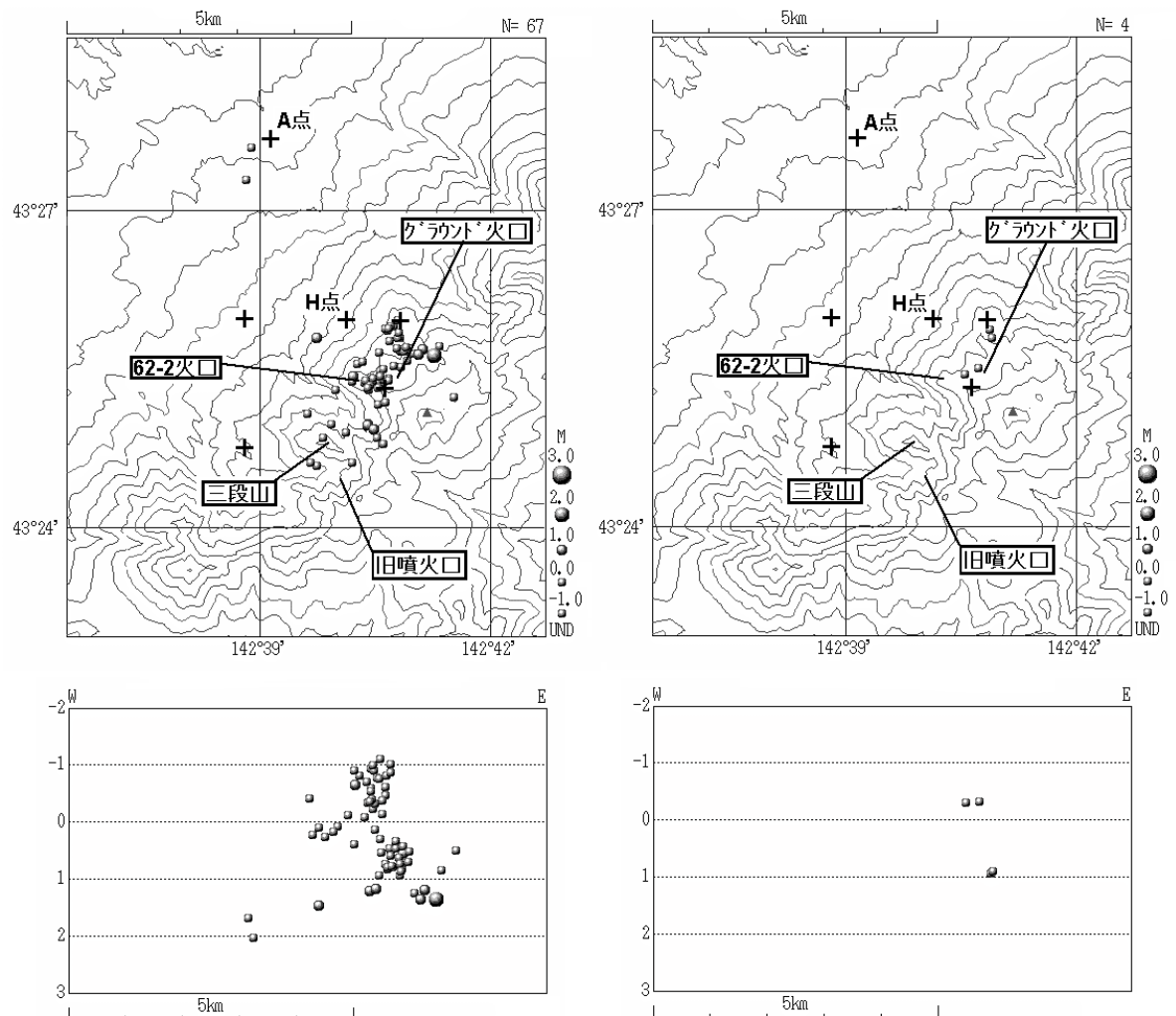
最近の火山活動経過図（1997 年 1 月 1 日～2005 年 9 月 30 日） ↑ 印はごく小規模な噴火

3 地震および微動の発生状況

62-2 火口付近の地震計（H 点）で、21 日 02 時 33 分頃から約 6 分間、振幅の小さな火山性微動が観測されました。小さな規模であったため、山麓の地震計（A 点）では明瞭な記録が認められませんでした。微動の発生源は 62-2 火口周辺の浅部と推定され、同火口周辺浅部における地下水や火山ガスが関係した小規模な現象と考えられます。なお、微動の発生前後で火山性地震の増加は見られませんでした。

地震・微動の月回数（H 点：火口付近の観測点 A 点：山麓の観測点）

2004～2005 年	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月
地震回数 H 点	11	20	30	60	20	86	14	14	26	17	41	29
地震回数 A 点	3	7	4	4	2	11	4	5	3	4	13	2
微動回数 H 点	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1



十勝岳の震源分布図（丸印：震源、+印：地震観測点、気象庁と北海道のデータを使用）

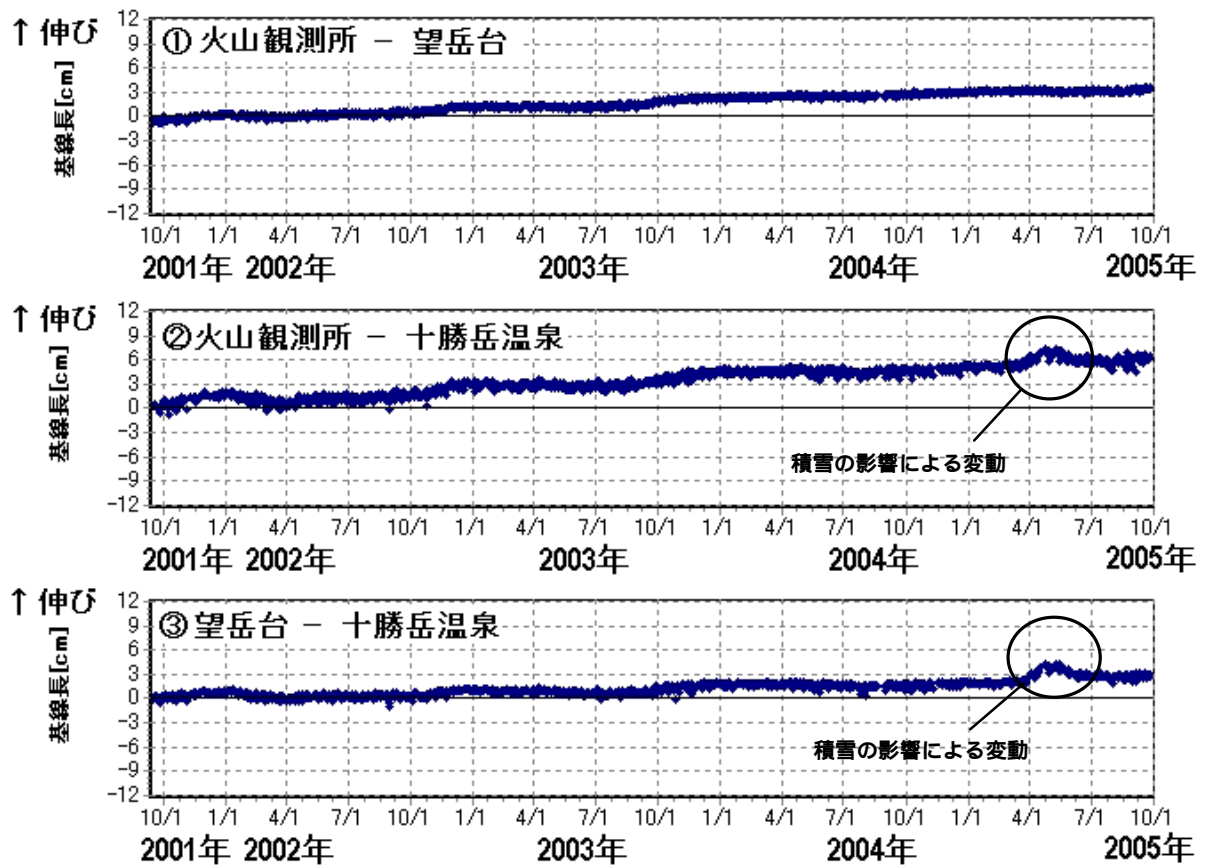
右図は今期間（2005 年 9 月 1 日～30 日）に求まった震源を示しています。

左図は前期間までの 11 ヶ月間（2004 年 10 月 1 日～2005 年 8 月 31 日）に求まった震源を示しています。

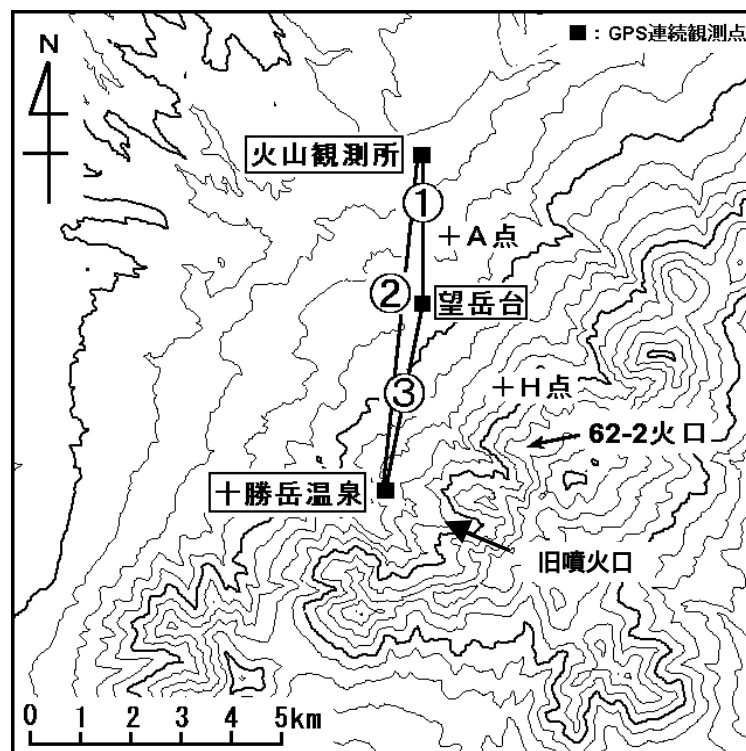
震源はグラウンド火口周辺と三段山～旧噴火口周辺の浅部（海面上 1km～海面下 1km 程度）に集中しています。今期間の震源もこの領域内に分布しています。

4 地殻変動の状況

GPS 連続観測では、火山活動に関連すると考えられる変動は認められません。



基線長変化（2001年9月13日～2005年9月30日）



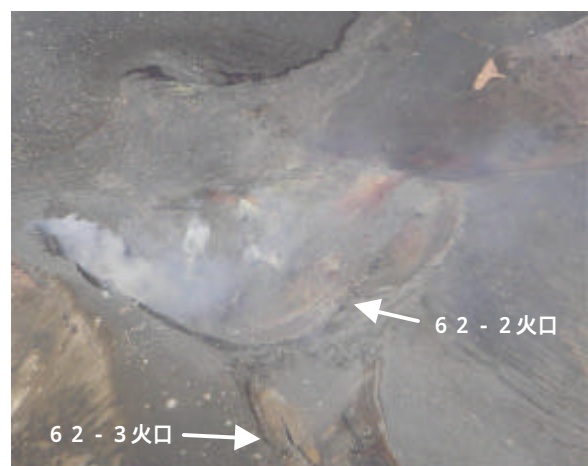
5 上空からの観測結果

9 月 12 日に北海道開発局の協力を得て実施した上空からの観測では、62-2 火口、大正火口、旧噴火口などの状況にこれまでと比べて特に変化は見られませんでした。

62-2 火口では活発な噴煙活動が続いており、西側および北側内壁の活発な噴気孔からやや青みを帯びた噴煙が 100m 程度の高さに上昇した後、風により東の方向へ流れていました。



西側上空から撮影した 62-2 火口と大正火口



左：南西側上空から撮影した 62-2・3 火口、大正火口、グラウンド火口、摺鉢火口
右：南東側上空から撮影した 62-2 火口と 62-3 火口

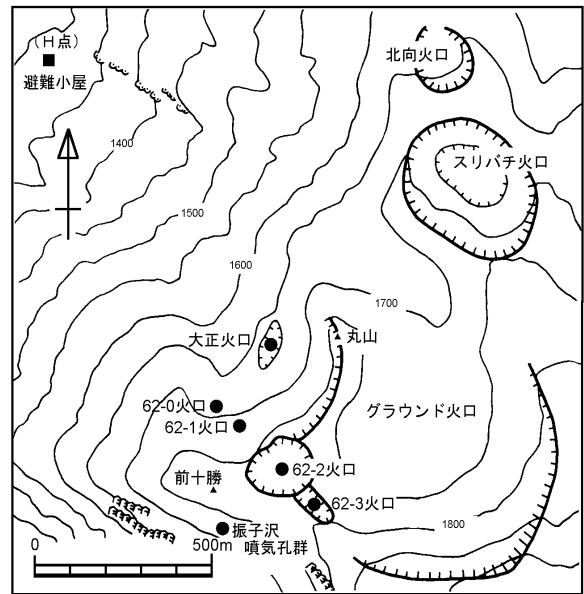
6 調査観測の結果

9 月 12～16 日に調査観測を実施しました。

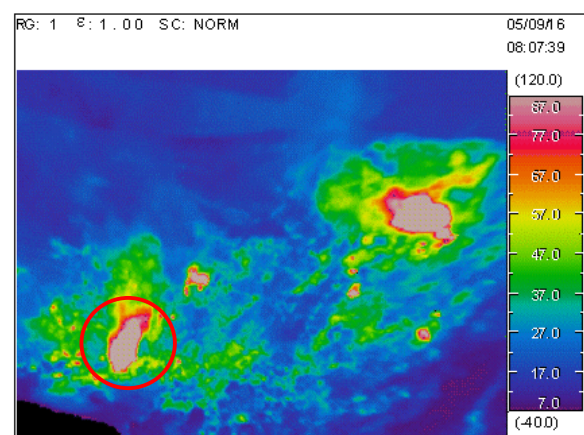
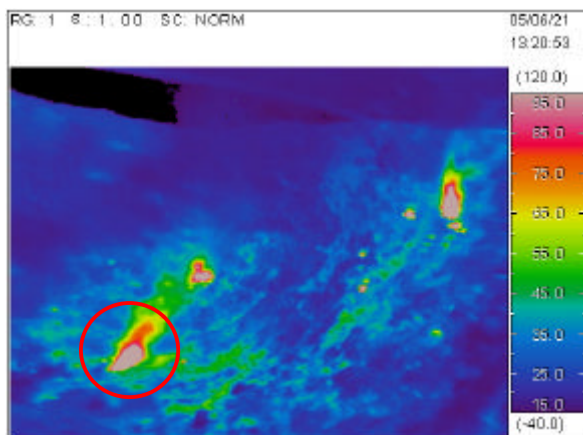
62-2 火口では引き続き活発な噴煙活動と高温の状態が続いていました。その他の火口も、前回（6 月）の状況と比べて大きな変化はありませんでした。

【62-2 火口】

活発な噴煙活動が続いており、火口縁では強い刺激臭が認められました。西側火口底の噴気孔は前回（6 月）と同様、透明な火山ガスを勢いよく噴出する非常に活発な噴気活動が継続していました。赤外熱映像装置*により測定した噴気孔の温度は約 400 で、前回（6 月：約 300 ）に比べ約 100 の上昇が認められ、昨年 9 月以降上昇傾向が続いています。遠距離（約 160m 離れた地点）からの測定のため、実際の温度はかなりの高温であると推定されます。



十勝岳火口周辺図



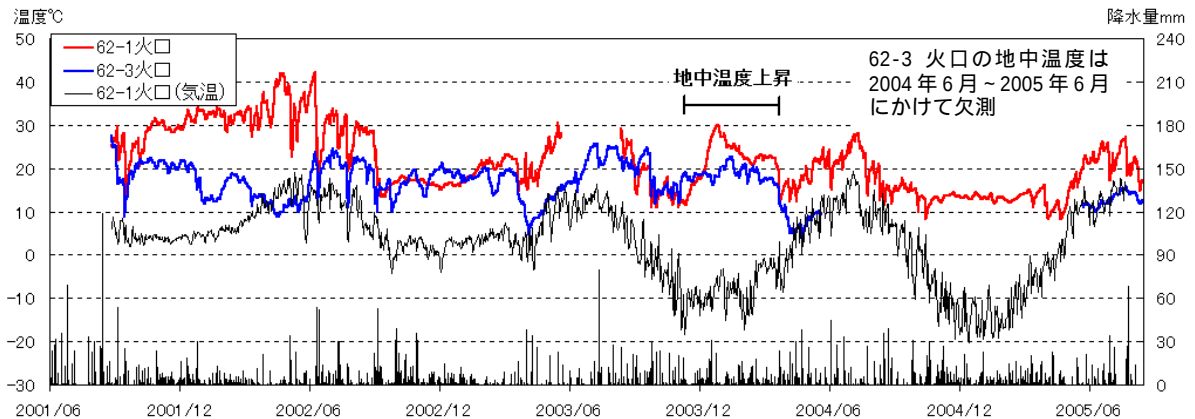
赤外熱映像装置による 62 - 2 火口の表面温度分布 ○ は西側火口底の活発な噴気孔
（左：2005 年 6 月 21 日 右：2005 年 9 月 16 日）

西側火口底の噴気孔からは、透明な噴気が非常に勢いよく噴出している。

【62-2 火口周辺の地熱域】

62-0 火口、62-1 火口、62-3 火口、振子沢噴気孔群における赤外熱映像装置*による観測では、高温部分の拡大や新たな地熱域は認められませんでした。

62-1 火口および 62-3 火口における地中温度の連続観測では、熱活動の高まりは認められませんでした。

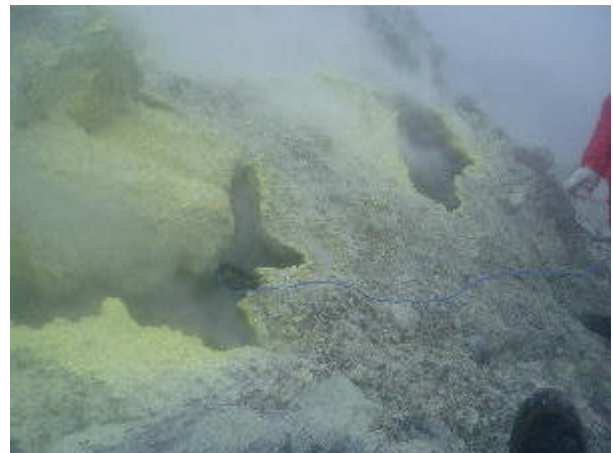


62-1 火口および 62-3 火口の地中温度（深さ 50cm）の推移（2001 年～2005 年）

【大正火口】

大正火口では赤外熱映像装置*による観測で高温部分の拡大は見られず、熱活動の高まりは認められませんでした。

東側火口壁上部のやや活発な噴気孔の最高温度は 222 で、前回（6 月：183 ）と大きな変化はなく、噴気の状態や変色域にも特に変化はありませんでした。

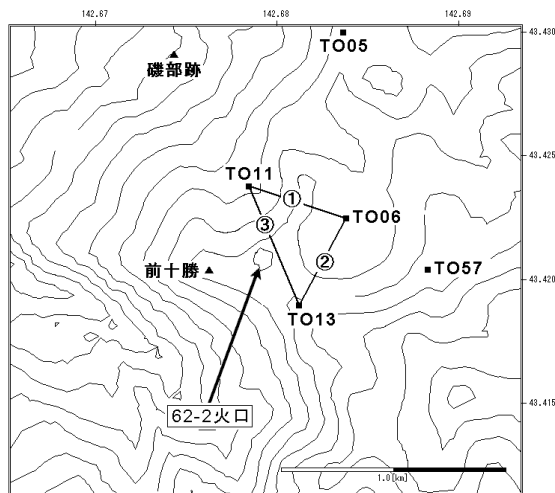


大正火口東壁上部の噴気孔

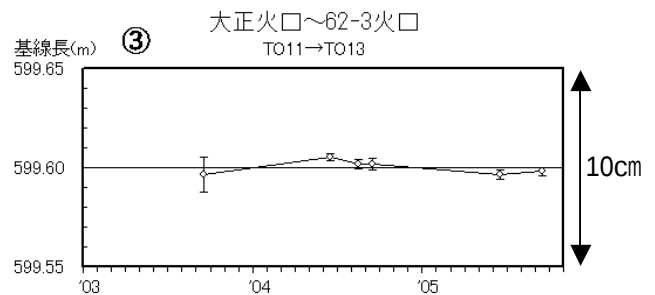
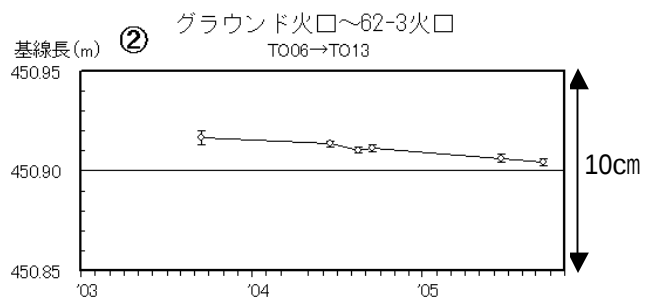
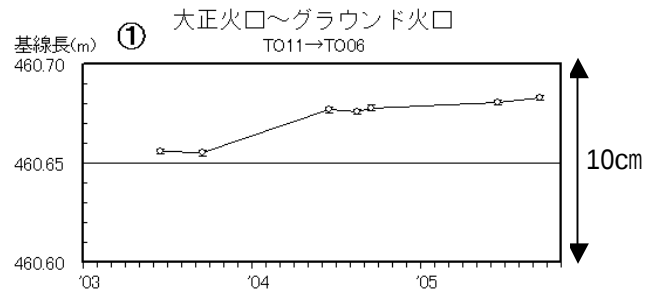
* 赤外放射温度計や赤外熱映像装置は、物体が放射する赤外線を検知して温度を測定する計器です。熱源から離れた場所から測定できる利点がありますが、熱源から離れるほど測定される温度は実際の温度よりも低い値になってしまいます。また、噴煙や霧で測定対象が見えにくい場合には温度測定ができないこともあります。

【GPS 繰り返し観測】

GPS 繰り返し観測では、62-2 火口を囲む基線では火山活動に関連する変動は観測されませんでした。



山頂 G P S 繰り返し観測位置



62-2 火口周辺の基線長変化